

開催にあたって

世界的にも人文学の危機が叫ばれて久しい。しかしながら、東アジアにおいては大学の組織改編に見られるように、アドホックな対応はみられるものの、人文学の危機への学問的な対応は十分とはいえない状況にある。たとえば、欧米においては現今の国民国家の枠組が衰頹しつつある趨勢にあつて、国民意識の形成に関わってきた人文学がその存在理由を失っていることはレディングズ『廃墟の中の大学』（1996 年）が説いたとおりである。

一方、東アジアの人文学は、近代国民国家形成期に帝国主義的な発展を遂げた日本の人文学の強い影響の下で成立し、相互に知的範型を共有していることや、冷戦的思考の残存による諸国間の緊張が継続していることもあつて、人文学の危機の由来や、問題の所在を把握しがたい状況にある。東アジア地域における植民地主義を克服し、国民国家を基盤にした人文学批判的な検討と、グローバル化時代に相応しい新たな人文学の探究は急務といわざるをえない。

以上のような認識の下に、早稲田大学文学学術院総合人文学研究センターでは、人文学の危機を克服し、新たな人文学の創出をめざして、平成 26 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に、研究プロジェクト「近代日本の人文学と東アジア文化圏—東アジアにおける人文学の危機と再生」を申請し、採択されることとなった。

「人文学の危機と再生」を東アジア規模において取り組むのは、「人文学の危機」について、この地域固有の共通した課題に留意しつつ、近代日本が先導してきた 20 世紀の人文学を自己批判的に検証することによって、東アジア地域における植民地主義を克服し、国民国家を基盤にした人文学からグローバル化時代が要請する新たな人文学へと知的範型の転換を東アジア規模で図ろうとする意図からである。

本シンポジウムでは、問題の所在を明確にするために、現今の課題を歴史的なパースペクティブに位置づけて捉えるべく、まずはヨーロッパの文明において人文学がどのように形成されたのか、それが日本を始めとする東アジア諸国の近代人文学の形成に如何なる影響を与えたのかを具体的に問いながら、グローバルな視点に立脚した新たな人文学のあり方を展望する手がかりを得ることを目的とする。このたびのシンポジウムが本研究プロジェクトのキックオフにふさわしい議論を期待したい。